降臨節第 4 主日　ルカ 1 章 39―45 節

［直訳］

39 だが立って　マリアは　これらの日々の中で
　行った　山里の中へ　迅速さと共に　ユダの町の中へ、
40 そして　彼女は入った　ザカリアの家の中へ、
　そして　彼女は挨拶した　エリサベトに。
41 そして　起こった　聞いたときに　マリアの挨拶を　エリサベトが、
　跳ねた　幼子が　彼女の胎の中で、
　そして　満たされた　聖なる霊で　エリサベトが、
42 そして　彼女は張り上げた　大きな叫び声を、
　そして　彼女は言った、
「祝福されて　あなたは　女たちの中で、
　そして　祝福されて　あなたの胎の実が。
43 そして　どこから　私に　このことが
　すなわち　来た　私の主の母が　私のもとに
44 なぜなら見よ　起こったときに　あなたの挨拶の声が　私の耳の中へ、
　跳ねた　歓喜の中で　幼子が　私の胎の中で。
45 そして　幸い　信じた女は　次のことを
　あるだろう　成就が　語られたことに　彼女に　主から。」

［新共同訳］

39 そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。40 そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。41 マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、42 声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。43 わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。44 あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。45 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

①構成

ⓐ39―40節

この段落に使われた動詞「立って、…行った、…入った、…挨拶した」はいずれも自動詞である。だから、動詞以外の要素は最後の「エリサベトに」を除けば、時や方向や様態を表す前置詞句である。このように行動を表す単純な自動詞を重ねることによって、エリサベトのもとにひたすら

急ぐマリアの姿が描かれている。この一連の行動が目指す目的は「挨拶した」ということである。

ⓑ41―42節前半

この段落ではルカの好む構文が用いられ、ルカにとって大事なことが述べられている。前の段落（39―40節）が天使ガブリエルのお告げを聞いたマリアの反応を書いているのに対して、この段落ではエリサベトの側に起こった反応が描かれている。エリサベトの胎の子どもが「跳ね」、彼女は聖なる霊に「満たされ」、大きな叫び声を「張り上げ」、「言った」。ここでも動詞を畳み掛けるように繰り返すことによって、エリサベトに起こった変化を動きをもって表現している。ここでの中心は「聖なる霊に満たされた」にあるだろう。

ⓒ42節後半―45節

42節後半と45節では、「祝福されて」いるマリアが「信じた女」であることを述べている。その間の43―44節では、胎の幼子が「歓喜の中で」跳ねたことを知ったエリサベトの喜びと驚きが「どこから」という修辞的な疑問文で表現されている。

②喜び急ぐマリア（39―40節）

ⓐマリアは「立って」、山里の中に「行って」、ザカリアの家に「入って」、「挨拶をする」。一連の動作を表す動詞を重ねることによって、ひたすら旅路を急ぐマリアの姿がいきいきと描き出される。旅の途中の描写は省き、直ぐにエリサベトの家に到着したかのように描くことによって、まっしぐらにエリサベトのもとへ駆けつけたマリアの姿が浮き彫りにされる。ちなみにナザレからユダの地方までは、山や丘の続く決して平坦でない道であり、3―4日はかかる旅である。

ⓑ神の救いの計画を知ったマリアはその喜びを分かち合うためにかけつけ、エリサベトに挨拶をする。ここでの挨拶は、神からの祝福を伝える手立てであって、単純な日常の挨拶とは違う。特別な挨拶であったことは、41節以下のエリサベトの反応からも明らかである。

ⓒ挨拶（アスパスモス）

㋐動詞形アスパゾマイは「誰かに挨拶する」。ごくまれに「歓迎する・喜んで迎える」（ヘブ一一13）。59回使われ、書簡の用例が多い。名詞形アスパスモスは、10回の用例がある。

㋑挨拶の目的や意味はさまざまである。イエスが宣教に派遣した弟子は、道中では誰にも挨拶してはならず（ルカ一〇4）、宣教先の家を訪れたら「平和があるように」と挨拶するようにと命じられている（マタ一〇12）。群衆はイエスを迎える挨拶をし（マコ九15）、兵士たちはイエスに「ユダヤ人の王、万歳」と侮辱の挨拶をする（マコ一五18）。律法学者やファリサイ派の人々は、広場での挨拶を欲しがっている（マコ一二38など）。「自分の兄弟だけに挨拶すること」は「自分を愛してくれる人を愛すること」（マタ五47）と同じだと見るイエスにとって、「挨拶する」ことと「愛する」ことは同じことである。パウロは宣教地を旅立つときには別れの挨拶を行い（使二〇1）、滞在する土地に入れば、兄弟に挨拶をする（使一八22、二一7）。アグリッパ王とベルニケも、カイサリアに来て、総督フェストゥスに表敬の挨拶をする（使二五13）。

㋒書簡の用例では、ほとんどは手紙の結びの挨拶に現れる（22の全書簡のうち、14の書簡の結びで使われる）。その際、パウロなど書簡の著者は、自分や仲間の挨拶を教会の人々だけでなく、しばしば個人名をあげて、その人に「よろしく挨拶してください」と教会の人々に言づけ

ている（ロマ一六章など）。

㋓ルカ 1 章では、動詞形が 40 節で、名詞形が 41 節と 44 節に使われている。マリアの挨拶がきっかけとなって、エリサベトの胎内の子は跳ね、彼女は聖霊に満たされ、賛美の言葉を唱えている。このような挨拶は、もはや単なる儀礼や個人的な好意を表明する挨拶を超えて、神の祝福を運ぶ手立てになっている。派遣された弟子たちが宣教先で行う平和の挨拶や（マタ一〇 12、ルカ一〇 5）、天使ガブリエルの挨拶（ルカ一 29）、そして復活のイエスの挨拶も神の祝福を運ぶ挨拶と言えるだろう（ルカ二四 36、ヨハ二〇 19）。

③聖霊が満たす喜び（41―42 節前半）

ⓐマリアが挨拶すると、エリサベトの胎内で幼子が「跳ね」、彼女は聖霊に「満たされ」、大きな叫び声を「張り上げて」、「言った」ということが起こる。ここでも動詞を重ねることによって、エリサベトに起こった変化を強調している。

ⓑ41 節前半の「マリアの挨拶を聞いたときに、胎の中で幼子が跳ねた」という表現は、44 節のエリサベト自身の言葉の中にほぼそのまま繰り返されている。しかし、41 節後半の「聖なる霊で満たされた」は、44 節のエリサベトの言葉には見られない。このことから考えると、エリサベトは胎内での幼子の動きを感じ、不思議な力が働いていることを自覚しているが、それが聖なる霊が降った結果だとは分かってはいない。

ⓒ41 節にはルカが読者の注意を引くために好んで用いる構文が使われている。この構文は次の三つの要素からなる。

㋐動詞「起こった」
㋑時を表す表現
㋒動作を表す動詞（不定法か定動詞で）

意味は「㋑で表された時に、㋒で表された動作が、起こった」となる。従って、41 節は「エリサベトがマリアの挨拶を聞いたときに、幼子が…跳ね、エリサベトが聖なる霊に満たされ、…張り上げ、…言ったということが起こった」の意味になる。

ⓓルカはこの構文を段落の初めか、あるいは重要なことを述べるときに用いている。41 節は段落の初めの節ではない。だから、この節にこの構文を用いたのは、何か重要なことを書きたいからだろう。ルカにとって「聖霊」は重要なテーマのひとつである。ルカがこの構文をここに用いたのは、エリサベトに無意識のうちに働いている「聖なる霊」に注目させたいからだろう。

④霊に満たされた者の叫び（42 節後半―45 節）

ⓐ不思議な力に促されてエリサベトはマリアに「あなたは祝福されて（いる）」と叫ぶ。この「祝福されて」は、神の恵みと祝福とが人の上に降っているのを知って、それを喜ぶ表現である。子どもに恵まれることは神の祝福の現れとされていたが、マリアの場合は、「主」となる子どもに恵まれている。だから「女たちの中で」という句が加えられ、女性の中でも、最も祝福に満たされた方だとエリサベトは叫ぶ。

ⓑエリサベトはマリアが身ごもっていることを、しかも「主の母」となることを知っているが、ど

こからそれを知ったのか。マリアがエリサベトに挨拶したときに、それを手短に伝えたとも考えられるが、そうであれば、40 節でマリアの挨拶を描くときに「(彼女はエリサベトに挨拶し)、天使が告げたことを彼女に語った」と加えてもよさそうだが、それはない。

ⓒむしろ、エリサベトに降った「聖なる霊」がそれを一瞬のうちに悟らせているのではないだろうか。彼女自身は聖霊が降ったことに気づいてはいない。しかし、マリアの挨拶の声がエリサベトの「耳の中へ起こったときに」、幼子が「歓喜の中で」跳ねたことを知った彼女は、出来事の秘密を即座に悟った。彼女は不思議な力が働いていることには気づいているが、それが「聖なる霊」だとは分からない。

ⓓエリサベトはその不思議さを「どこから」という問いかけで表している。しかも「私に」が強調されていることから考えると、「私のような者に、どこから起こったのか」の意味かもしれない。そうであれば、この問いかけが驚きと喜びの表現であることはいっそうはっきりする。エリサベトは不思議な力の働きを確かに感じ取っている。それは胎の幼子が跳ねたことを「歓喜の中で」と表現していることからも分かる。「歓喜」と訳された言葉は、神の働きを身近に感じた者の喜びを表すからである。「幼子が歓喜の中で跳ねた」という表現には、一瞬のうちに神の計画を悟り、それに参与していると知った者の深い喜びが込められている。

⑤聖霊が神の計画を知らせる

ⓐルカは挨拶があったことを述べるだけで挨拶の内容にまったく触れず、その内容を推測させるような手がかりも何ひとつ与えてはいない。そうであれば、挨拶の内容をルカは意図的に書かなかったのかもしれない。ルカにとって、神の計画を知らせる使者は天使だけではない。エリサベトはマリアから伝え聞かなくとも、天使によってマリアに語られたことを直接に知る道がある。それが聖霊である。聖霊に満たされたエリサベトは大きな声を張り上げて、「あなたは女の中で祝福された方です」と叫ぶが、この大声は、霊に満たされ、救いの奥義を知り、喜びに満たされた者があげる「大声」である。

ⓑルカ福音書や使徒言行録に現れる聖霊に特徴的な働きは「語らせる」ということである。聖霊は言葉を語らせる力であり、語り出す言葉は「神の言葉」である（使四 31）。さらに、聖霊によって異言や預言が語り出される（使一九 6）。イエス自身も「聖霊によって喜びにあふれて」語る（ルカ一〇 21）。ルカにとっての聖霊は、神の言葉や神に関わる事柄を語らせる力である。聖霊に満たされるといっても、「神がかり」となって異常なことを語り出すことと同じではない。むしろ、出来事を通してかいま見た神の救いの計画を語ることである。神の救いの秘密を見ているから、当然、喜びがある。

ⓒルカ 1―2 章に登場する人物はエリサベトだけでなく、ザカリアもシメオンも聖霊に満たされて、賛歌を歌っている。彼らは皆、聖霊が知らせた救いを賛歌に込めて歌っている。ルカは彼らの賛歌によって、救いの計画がクライマックスに到達したことを述べている。

ⓓ急いで駆けつけるマリアと大声で叫ぶエリサベト。この二人の女性を通して浮かび上がるのは「聖なる霊」の姿である。聖霊が降ったとは本人も気づいてはいない。しかし、「大きな叫び声を張りあげる」という反応によって、それが現される。真の主人公はマリアでも、エリサベトでもなく、聖霊である。聖霊がエリサベトの心と口を開かせ、主の母の到来を歌わせている。